博物館実習生の受け入れ

昨年度からおこなっている博物館実習生の受け入れも２年目をむかえました。今年度は９月３日（月）から７日（金）までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。

博物館実習風景

実習生はそれぞれ奈良女子大学から２名、帝塚山大学から４名、滋賀県立大学と広島大学から各１名の計８名と昨年度の５名に比べると、少し増加しています。徐々にではありますが、当館が博物館実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されつつあるのでしょう。

実習は、展示品貸借の実務、展覧会の実施について、博物館における展示解説、展示解説とマルチメディア、建築史概説と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品貸借の実務」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調

査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

「建築史概説」では、実習生の全員が建築学とはまったく関連のない学部に所属していることから、まず飛鳥時代における伽藍配置の推移を説明し、山田寺金堂復原模型を用いて飛鳥時代建築における細部の様式および特徴、部材の名称、奈良時代建築との違いなど簡単に講義しました。これをもとにして、演習では建物がどのように組み上がっているのかを自分の目で確かめてもらうために、復原された山田寺東回廊の展示部分のスケッチをおこないました。このような経験は大学ではほとんどないらしく、てこずる実習生もいました。

今年度の博物館実習が実習生にとって有益なものとなったかは現段階ではわかりません。しかし、少なくとも飛鳥時代に興味をもってもらうことはできたように思います。実習生の受け入れは、来年度も引き続きおこなわれます。はたして、次回は実習生が何人来るのでしょうか。　（飛鳥資料館）